



大明小学校

校長室から

令和元年6月4日

No. 11

文責 校長 飯久保一男

子どもをほめること



子どもを育てていくのに、ほめて育てることが推奨されています。叱って育てるよりもほめて育てた方がいいことは確かなことです。しかし、大人が下手にほめることで逆の影響が出てしまう場合もあります。

例えば…、いい加減な掃除をしている高学年の子たちに「すごいねえ、さすが高学年生だねえ。がんばってるね。」と教師が声をかけたとします。この教師を子どもたちはどう思うでしょう。高学年の子どもたちは、大人の心を読むことには敏感です。口先だけでほめても、その腹の内は見透かしています。たいしてががんばっていないのにほめられると、この人は自分たちのことがよく分かっていない人だと思ってしまいます。もしかして皮肉を言われているの…？ などと勘ぐってしまうことになります。このようなほめ方では子どもを育てられません。

また、ほかの子と比べるほめ方も感心できません。「〇〇くんよりがんばったね。」「〇〇に勝ったね。すごい！」といった、ほかの子と比べるほめ方は、結果だけにこだわり、努力する目的を見失わせ、人の目ばかりを気にする子に成長するリスクがあります。友だちのいいところを認めたり、友だちの成功を喜ぶことができなくなったりと、劣等感や妬みの気持ちが芽生える可能性もあります。

さらに、報酬を与えることにも難しさがあります。成績や結果がよかったら、物を与える、買ってあげるということは、子どもの物的要求だけを高めることにつながるよう、慎重にすることをお勧めします。まして、成績が悪くなったからおこづかいは無しなどとペナルティを与えることは、子どもにいい影響はないといわれています。

ほめたことが、逆に働いてしまったという、こんな話を聞いたことがあります。

幼稚園で給食を食べている子どもたちのところへ、園長先生がやってきました。一人一人の食べっぷりを見て回った園長先生は、残さずにしっかり食べている女の子がいたので、

「あなたはいい子だね。好き嫌いなく、残さず食べられる子が一番いい子だよ。」

と言ってその子をほめたそうです。その子は、この園長先生の言葉がずっと心に残ってしまいました…。それからというもの、給食を残さず食べないといけない、給食を残すことはとても悪いことだという、いわば強迫観念のようなものができあがってしまい、毎日の給食の時間が楽しいものではなく、苦しいものになっていったのです。

やがて小学生になり、この子は給食が食べられないようになってしまい、登校を渋るようになり、ついには不登校になってしまったということです。

これは、特殊な例かもしれませんが、子どもによっては、ほめることによって、その子に強い価値観を与えすぎてしまうことにもなることもあるようです。この園長先生もそんなつもりは全くなかったと思いますが、この子のことを理解していないでかけてしまった言葉になっていたのです。

また、家で、この子が園長先生にこう言われたと話したときに、親が

「でもね、どうしても食べられないときは残してもいいんだよ。」

と言ってやれたなら、この子もぐっと楽になったのかもしれない。



ある調査によると、夫が妻から言われる言葉で

「言われて、うれしい言葉」 第1位 → 「がんばって」

「言われて、つらい言葉」 第1位 → 「がんばって」

だったそうです。「よし！」と気合の入っているときは励まされるとうれしいものですが、精一杯やっているのになかなかうまくいかないとき、落ち込んでいるとき、疲れているときに励まされても、気持ちの分かってもらえない言葉、負担になる言葉になってしまいます。こういうときは、「無理しないでね」などと（我が妻からは全く期待できない言葉ですが…）言ってもらえるといいのでしょうか。要は、言う相手の気持ちを汲んでいる言葉かどうか大切ということになります。

子どもにどんな言葉をかけることが、その子どもをほめて育てることになるのか、自然にそういう言葉が出てくる親であり、教師であるために、親も教師も勉強（研修）が必要です。

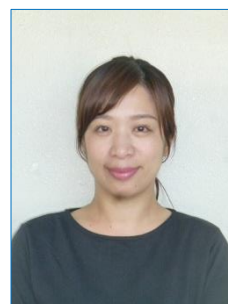
そこで！

今年度、本校には心理の専門家のスクールカウンセラーが配置されています。気軽に相談してみませんか？ 申し込み、お問い合わせは、校長（学校282-3113）までお願いします。

スクールカウンセラーの 岩橋 幸恵 です。

今年度から月曜に来校しています。

小学生の心と体の成長は著しく、保護者の方も、子どもを理解したり、関わったりする際に戸惑いもあるかと思えます。どんなことでも大丈夫ですので、お気軽にご相談ください。



けなされて育つと、子どもは、人をけなすようになる

とげとげした家庭で育つと、子どもは、乱暴になる

不安な気持ちで育てると、子どもも不安になる

「かわいそうな子だ」と言って育てると、子どもは、みじめな気持ちになる

子どもを馬鹿にすると、引っ込みじあんな子になる

親が他人を羨んでばかりいると、子どもも人を羨むようになる

叱りつけてばかりいると、子どもは「自分は悪い子なんだ」と思うってしまう

励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる

広い心で接すれば、キレる子にはならない

誉めてあげれば、子どもは、明るい子に育つ

愛してあげれば、子どもは、人を愛することを学ぶ

認めてあげれば、子どもは、自分が好きになる

見つめてあげれば、子どもは、頑張り屋になる

分かち合うことを教えれば、子どもは、思いやりを学ぶ

親が正直であれば、子どもは、正直であることの大切さを知る

子どもに公平であれば、子どもは、正義感のある子に育つ

やさしく、思いやりを持って育てれば、子どもは、やさしい子に育つ

守ってあげれば、子どもは、強い子に育つ

和気あいあいとした家庭で育てば、子どもは、この世はいいところだと思えるようになる